最終号

静私幼だより

みてみて！さいてるよ!!

- 教員養成機関と私立幼稚園振興協会との意見交換会
- 特集「子どもと大人の育ちを手伝う仕事（その4）」 香野 毅
- 特集「子どもたちと表現を分かち合うためのヒント」 なるかわしんご
- コミュニティ（保育の窓）
- もの想い（御殿場聖マリア幼稚園／上野幼稚園）
- 歴代広報委員長一覧・現広報委員の一言感想
- ナイスショット&編集後記

こどもがまんなかPROJECT
只今全国展開中

NO.200
2024③
Spring

教員養成機関と私立幼稚園振興協会との意見交換会

令和６年１月１９日㈮ 私学会館にて教員養成機関と私立幼稚園振興協会との意見交換会が開催されました。昨年につづき名刺交換会も開催し、参加者からは良い機会となりよかったとの声をいただきました。意見交換会の分散会ではそれぞれに分かれ、就職と実習について各グループ意見を出していただきました。

就職について

▶入学当初は「保育園」志望が多いが、「幼稚園」志望も３割程度はいる

▶就職先については例年とあまり変化はないが、学校によっては一般企業に就職する学生も増えてきている。幼保の選択は学生次第。施設への就職も増えている

▶Z世代に幼稚園のブランドが響くかどうか。教育、教育といわれることが嫌だと感じる学生もいる

▶就職難といわれるが、養成校側も学生が減少し、定員割れが続いている。保育系は厳しい状況がつづいている

▶中高生の時期から保育業界に興味を持ってもらう仕掛けが必要。行政・園・養成校の協力が必要。昨年は保育現場での事件や事故がとりあげられ、保護者が勧めない事例も多くみられる。また学生も自分で決められず、大人の意見を求める傾向も強い

▶実習に行った際の職員同士の会話や、園の雰囲気を気にしているようである

▶残業時間や有休消化率などの処遇や待遇も就職選びの条件となってきている

▶就職選びの際に、自主実習も大切であるとは分かっているがバイトなどもあり実現不可能な状況があるようだ

▶幼・保の垣根はなくなってきているが、初年度に一人担任は辛いという学生は多い。三年目担任ならよいという学生もいる

▶就職決定の時期について

- 早期の内定が増えているが、学生と園とのマッチング不良を招き、結果早期退職に繋がるリスクを孕んでいる。最低限のモラルを守り、幼稚園、こども園と保育所が連携し、教育実習を含め学生が希望園を熟慮する機会と時間を確保したい
- 早く決めたいと思う気持ちもわかるが、早いからいいというものではない
- 県によっても違う
- 静岡県は、早いのではないか（神奈川県は、９月や10月頃）
- 夏休みを利用して、自主実習を行ってほしいが、採用試験が早い時期だとできない
- 就職の求人・試験時期など全県で統一してもらえると両者にとって動きやすいのでは？愛知県は６月求人、９月試験となっている

▶学生の小規模園志向が強い傾向にあるが、園によっては劣悪な環境もあったりする。そのような現状を学校側では学生に説明しているか

→学校としても、小規模園についてのメリット、デメリット等一定の実情を伝えた上で学生に指導支援している

▶内定者の就職前研修について、学生からもっと研修しておけば良かったという声が出ることがある。養成校側としてはどのように考えているか

→学生と園でスケジュール調整をして研修をしていけたら良いと思う

→就職前はあくまでも学生なので、研修等は就職してからおこなってもらいたい

▶園として採用試験や就職についてピアノの技量について最低限どの程度求めているか

→ピアノが苦手な職員はいるので、就職してから長い目で育てていきたい

→採用試験にピアノを導入しているが、苦手であっても就職後に園として講師を雇いコード奏法を中心にレッスンを受けさせ、これにより確実に上達している

→ピアノ試験は行っていない。得意な職員が電子ピアノで録音した音源を使いまわしたりして対応している

→以前と比べたら、必須にはなっていない

→得手不得手があり、自分の得意なところを発揮していけばよいのではないか

▶学生は幼稚園ナビをつかって、園のサイトは見ている。また、学生が自ら、紙ベースの就職案内の情報などを閲覧しに来ている。相談しやすい雰囲気で学生が立ち寄りやすい場を心がけている

▶複数園の採用試験は問題ないか

→一般の企業では、当たり前だが園は採用人数により次年度の運営が変わる。採用となった学生が、他園の試験も合格し内定取消したいとなると、その後採用が大変となるので、この業界においては難しいのでは…

→問題ないと思うが、もう一方の園への配慮も必要になる

→就職後のミスマッチを減らすために複数園を選択肢にすることはよいことだが、採用試験の前に園見学や自主実習を重ねることの方がよいのでは

→公立との併願は良いと思う。そういう事例は増えてきているのでは

→保育所と幼稚園、あるいは公立、私立それぞれの就活時期のズレがあり、一度決まった内定を取りやめることは、採用園と養成機関、採用園と学生との信頼関係を損なうリスクがある。モラルという点を考慮しても学生にとっては今の状況の中で一度決めた内定を辞退するストレスは大きく難しいのでは

→内定取り消しや辞退については相互理解を十分にとり、禍根を残さないような配慮が必要

▶中途採用の情報などを養成校側に求めてくる元学生はいるか

→ホームページに問い合わせが入ったことがあった

→園側からも、中途採用がある場合情報を紙ベースに入れて養成校側に打診可能

▶就職後の職員の発達障害についての事例が増えているが、養成校も気づかず就職してしまうこともある。養成校で分かっていれば、必ず就職先に伝えるようにしている。また、高校側が隠して入学させてしまうこともある

▶就職フェアの幼保合同開催を求めたい。または時期を合わせてくれると助かる

▶協会の就職フェアについては、加盟園に最大限メリットがあるよう配慮しているので合同開催は難しい面もあるが、市町によっては行政が主催し合同開催しているところもある。これからは幼稚園、保育所という枠組みをはずし、共にPRしていくことがより必要になってくる

▶斡旋業者に登録しないように養成校側が指導してほしい。内定後に斡旋業者に名簿が載っていて契約金等を要求された例が報告された。斡旋業者がどうしてもひかなかったため就職を取りやめにしたとのこと。斡旋業者への対処法について指南書のようなものを協会から出してもらえないか。養成校側も斡旋業者や紹介会社に登録しないよう指導しているが、誘導が巧みで、ネット上で園探しをしていると導かれて、その気はないが登録してしまった学生もいた

▶男子学生が実習後に就職を希望したが「男性は採用しない」という理由で断られたケースがあった。そういう園があるのならば教えてほしい。実習に行かせないようにすることも考えるが、ジェンダーフリーの時代にそれは就職差別にあたらないか

実習について

▶実習時の休憩時間について配慮して欲しい。保育や教育についての質問時間や勤務時間の確保も同時にお願いしたい

実習記録の書き方について、修正箇所に二重線や訂正印を義務付けている園もあるが、負担軽減の観点からもう少し寛容にしていただくことはできないか

→実習記録の記述方法については、実習そのものに悪影響が出ないよう、概ね配慮し寛容にしていると思うが、園によっては厳しいものを求めることもあるため、各園と養成校相互に事前の話し合いが必要である

▶実習時のパワハラについて十分注意して欲しい。養成校側から実習園に対して事前に書面で要請している事例もある。

担当教諭を交替依頼したり、状況によっては実習を辞退したことも実際にあった。学生の心が折れ易いという現状も確かにあるが、立場の弱い学生が必要以上に自信喪失してしまうことが無いよう求めたい。また他園に内定が決まった学生に対して、「内定園で実習したらいい」ということを言わないで欲しい

▶不適切保育に敏感な学生が増えている。学生は実習中に保育者の言動をよく見ている。養成校側に不適切保育の報告をする学生が多い

子どもと大人の育ちを手伝う仕事

～子どもの権利を護るということ～

その 4

香野 毅

1970 年、佐賀県生まれ。静岡大学教育学部教授。博士（心理学）。専門は障害児心理学、臨床心理学。九州大学教育学部卒業。同大学院を経て、九州大学発達臨床心理センター主任、2000 年より静岡大学教育学部講師、同准教授を経て現職。
大学の教育・研究に加え、幼保こども園の巡回相談、学校の相談や研究助言、研修講師を引き受ける。障害児者の療育訓練会、発達障害児の親の会、静岡特別支援教育勉強会などを催す。NPO 法人しずおか福祉の街づくりの理事、心理臨床学会理事、日本リハビリテイション心理学会常任理事など。

昨年は仕事の関係でモンゴルに２回ほど行くことができました。気候、風景、食事、移動距離などインパクトの強い訪問でした。海外に行くと、最初は物珍しさに目を奪われますよね。見るもの、聞くもの、食べるものすべてが新しく刺激的です。それは滞在中ずっと続くのですが、次第に日本のそれらと比べる感覚も立ち上がってきます。すると「あ、自分たち（の文化や習慣）ってこうなんだ！」と気づいたり、考えたりします。異なるものに出会うことは、自らを知ることにつながるようです。

ここ数年、多様性という言葉をよく耳にするようになったかと思います。国籍や出身、性にまつわる様々なこと、障害や特性、生き方…みなさんは何を連想されますか。当事者やその関係者たちが次々に声をあげ、存在を表明しています。この言葉に出会いはじめたころは、なるほどそういう人がいるんだ、自分や自分たちとは異なる部分を持っているんだという“発見”や“気づき”が主たる体験でした。今は、次の段階である“尊重”に入ったように感じています。異なっていること、違いがあることを前提として、どのように生きてもらうか、いかに（心地よく）共存していくかを考える時期です。そんななか最近思うのは、多様性をただ認めるだけでは尊重に至れないということです。

障害者差別解消法という法律があります。この法律は、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、障害を理由とする差別の解消を推進するものです。「人として卑下したり、不当な評価を行ったりする差別」が許されないことは誰も疑いのないところです。さらに障害を理由に、国民一般が持っている権利や生活を制限してはならないとされています。例えば公共交通機関を利用できない、学校教育を受けられない、就職の制限があるといったことです。これらが実現できるよう合理的な範囲で配慮が行われなくてはなりません。例えば、駅に簡易スロープを設置する、公共的なニュースに字幕や手話通訳をつけるなどです。これを合理的配慮の提供義務といい、これを行わない、拒否することも差別です。これについてはバリアフリーなどのスローガンでわが国でも取り組まれてきましたので、少しずつ浸透してきているでしょうか。でも、ただそれだけでは至れない部分があると言わざるを得ません。それは

我々が無自覚的に、潜在的に持っている差別や偏見のあたりにありそうです。

大学生に、街で困っている人に手助けしますか？と尋ねたところ、多くの学生が戸惑いの返答をしました。そのひとつの理由は「相手を困っていると決めつけることは、こちらの優位性を確認することでもあり、手助けがマウント取りに行く行為にも感じられる」とのことでした。さすがの瑞々(みずみず)しい回答です。そうなのです。障害のある人を支援することは、障害のない者から「できない」人への施しの側面をもちます。提供する人と提供される人という役割の決めつけや、自分の多数性や優位性を確認することが含まれています。これらのことに気づき、自覚したとき、行動は躊躇(ためら)われます。無自覚に行うことは、ときに押しつけがましく、暴力的ですらあります。ここは読者のみなさんに共感してもらいにくいかもしれません。あるいは何が悪いのか？と反論があるところですが、ここを厳しく追及する態度が必要です。なぜならほとんどの差別や偏見は無自覚なところに潜んでいるからです。

この無自覚的な差別や役割への期待（押し付け）、分かりやすいのはジェンダーに関することでしょうか。今も続くジェンダー研究は、男性が巧妙に優位性を埋め込み、再生してきたことを証明しています。学業、職業、文化、慣習…。いかに無自覚的でも、一つや二つくらい思いつくものです。子どものときに田舎の親戚の家で大人数が集まったとき、男性たちが飲食をし、女性たちが家事をしていた光景を思い出します。かくいう私も席についておじさんたちと談笑していました。あの疑いようもなく自然なことだと思わされていたこと、今になってようやくその不自然さに気づくことができます。きっと中年男性である私には、いまだに気づけていないことがたくさんあると思います。

さてここまですべて前置きです。子育ての話しに展開します。もっとも多様性が尊重されず、差別的な営みが行われやすいのは家庭という場所であり、親子という関係です。私たちは、まずこのことに自覚的にならなくてはなりません。家庭の様子というのは密室的で外からみることができません。かつ親子というのは上下関係になりやすく支配的です。そう、これらは仕方のない条件でもあります。だからこそ、そのリスクを自覚しておく必要があると思うのです。

子育てとは、唯一無二の親子が繰り広げる自由な営みです。100 の家族があれば 100 通り、100 人の子どもがいれば 100 通りの育ちがあるといえます。まさに多様性の極みです。その豊かさはみなさんがよく知っている通りです。でも、だからこそ譲れないことがあると思います。それは子どもの権利を奪ってはならないということです。安全であること、衣食住が保障されること、自由な意志や行動が認められることなどは、今やすべての人に共有されていることでしょう。世界で最も広く受け入れられている人権条約である「子どもの権利条約」を改めて読むことは意義深いと思います。これが最低ラインでもあり、到達目標でもあります。さらに本論で話題にしてきたことは、我々大人が無自覚的に子どもの権利をないがしろにしていないだろうか!? ということです。幼さや未熟さを理由にして、必要以上に支配したり、押し付けたりしていないだろうか。それは大人の優位性や強さを顕示することに動機づけられていないだろうか。自分の満足や誇張のために子どもを誤用していないだろうか（虐待の英語は Abuse。別の日本語訳は誤用です）。

目に見える範囲では、きっと理性的で誤りのない子育てがなされています。現在の我が国はその水準まできていると誇れます。でも隠れたところ、見えないところ、自覚のないところではどうでしょう。これからはそこを突き詰めていくステージなのではないでしょうか。

子どもたちと表現を分かち合うためのヒント

～絵を描くことが嫌いにならないためのコツ～

なるかわしんご

1989年、三重県四日市市生まれ。中京大学総合政策学部卒。商社、アパレルメーカーなどを経て、2014年なかがわ創作絵本教室、中川たか子に師事。イラスト・絵本制作、ワークショップ、研修などを全国で活動開始。2018年、愛知県名古屋市を拠点に子育て支援などを行う、特定非営利活動法人ひだまりの丘に所属、現副理事長。同法人にて児童虐待を予防する為の活動「子はたからプロジェクト」や児童虐待における実態調査を行う。

代表絵本は「きみがうまれたひ」（空とぶロバ出版，イマジネイション・プラス）／「くまとかきのみ」「あっぷっぷ」などがある。

僕が絵本作家になると志して2024年で10年が経ちました。絵本を創作し、届けるというアプローチ以外にもいろんな手段を使いながら、子どもたちと、あらゆる命と接点を持たせていただき、面白いと思うことを面白いって感じ合えるような世界を創造したいと思います。

さて、テーマについてですが、僕は乳幼児から大人までさまざまな方とワークショップをしています。親御さんからのご質問でよくいただくのが「どうすれば子どもが絵を描くことを嫌いにならないようになりますか？もしくは、好きになりますか？」ということ。また、保育士研修などで現役の保育士さんとお話しすると、「私、絵が苦手なんです…」という感想は少なくありません。

幼少期に「私、絵が苦手！」という子どもは僕の経験上見たことがありません。「絵を描きたいか、描きたくないか」はあります。今したくないとか。絵を描く前に何かしら子どもの中で問題があったりとか。もちろん、発達の程度もあります。手や服を汚したくない、予想外のことが起きるのが怖いなど、特性として配慮する必要がある場合もあります。けれどもよくよく分解していくと、絵を描くことそのものが嫌いというのは少ないような気がしています。

前置きが長くなりましたが、これらのような例外、特性は細かく言及しませんが、いつから「絵を描くということが嫌いになるのか、難しくなるのか」ということについて考えていきたいと思います。ここがタイトルにあるテーマであり、僕たちが子どもたちへできること「保障できるヒント」があると思っています。

子どもたちが、絵を描く・描いたことで何かしらの「ネガティブな心理的体験（痛み）」をその時受けたので、成長するにつれ「苦手・嫌い」というクッションを創り「絵を描くということで起こる痛み」を和らげたり、避けるという行動につながっているのではないかと思っています。結果的に描画表現が嫌い・苦手という構造になってしまう、というお話です。痛みの体験のきっかけが外からなのか、内からなのかは個人差があると思います。僕たち大人が子どもたちと関わる上で、何を大切にしてあげればより適当であるか。安心して子どもたちの表現が保障されるのか。子どもたちに関わるみなさまへ僕の知見にはなりますが、ひとつの知見としてお役に立てたらと思っています。

□こちら側の視点ではなく、子どもの非言語のボリューム・興味関心を観察する

身体・言語の発達に伴い、快・不快の表現をはじめとしたあらゆる活動が盛んになっていきます。幼児画の発達で言いますと、錯画期、象徴期、前図式期など段階を経て表現が変わっていきます。２・３歳ごろから身体的に円運動ができるようになるにつれて線を丸く繋げたりするのが観察できるようになります。※（補足）【造形表現活動が始まるとはどういうことか】『子どもの絵は何を語るか』（NHK出版）

言葉が遅れていたとしても、こうした描画表現が多い子どもたちを今まで数多く見てきましたが、後々すごくおしゃべりだったり、独創的なものを作ったり、つぎつぎに遊びを展開したりと活発です。言葉も本人のペースで整ってきます。ある程度の描画ができる年齢（3・4歳ごろ）になった子どもたちの絵のボリューム、筆圧などを観察し、どれくらいのエネルギーが表現としてその子から出ているのか。こちらから見た上手、下手などの評価や質的なものではなく、量的なところに重点を置き、声をかけています。誤解がないよう「量がないとダメ」とかではありません。量が少なくても、色が混ざることに興味がある、対象を塗

りつぶす、自分の決めたパターン・ルールで描画するなど、できるかぎり、その子どもの特性を見極め、声をかけていきます。力強く絵をたくさん画面いっぱいに描くことに興味がない子に「ほら、〇〇ちゃんみたいにたくさん描いたら？」というのは NG です。テストではありませんので、正解 / 不正解の世界で何かを表現させるのは控えた方が良いと思います。前述した「私の表現は〇〇ちゃんみたいにしないといけない」など感覚で今自分が表現していることへ NO が突きつけられてしまい、結果的に表現することをおそれ、他者を真似て安心するパターンを取るか、絵を描くことそのものが嫌いになると学習するでしょう。こうしたケースが未就学時から学童期どちらでも起きていると推測しています。

□表現を分かち合うためのヒント

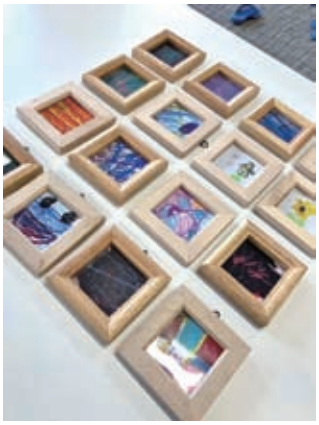
表現は、本来評価し得ない対象だと思っています。辞書で引いていただくと、表現とは、心に思うこと、感ずることを、色・音・言語・所作（態度）などの形によって、表し出すことを指します。あなたが思ったことを思ったように表現したら「その表現は下手ですよね」と言われると悲しいですよね。表現はあくまで感じ合うものであり、作品ではないのです。その区別が形成できていない期間に、作品としてしまう（評価される対象になる）と絵を描くという表現を恐れるのは自然のことかと思います。ただただ受け止めてほしい。それに尽きるかと思います。今の気持ちを言葉かそれ以外で表現しようと言われたら、幼児期の子どもたちは言葉以外で表現する方が生き生きとするでしょう。

絵を描くことが嫌いにならないように、その子がありのままの表現を楽しむためには、どうすれば良いか。まず、技術的なことを本人が望んでないのであれば、アドバイスする必要はありません。非言語と言語の優位性が大体９歳前後で変わるといいます。９歳前後までは非言語の方が子どもたちにとっては伝えやすい、表現しやすいツールになっているということです。したがってその年齢を基本に、あまり描画の技術を徹底的に教えるというようなことや、上手、下手というような世界は彼らに必要ないと思っています。むしろありのまま表現することを阻害する要因になると思います。評価、指摘、指示ではなく、子どもたちが表現することをただただ、繰り返し言葉にして伝えてあげてください。その過程を愛してあげてほしいと思います。

実例ですが、ワークショップに来た６歳の女の子が、A3 程度の画用紙に小さい鳥のような絵を描いていました。「鳥さんがいるね。鳥は好き？お家で飼っているの？」など声をかけましたが、首を縦に振るだけでその時は僕と目を合わせられなかったようで、少し距離をとって見守っていると、蝶を描いたり花を描いたり、次第にたくさん絵がでてきました。四隅にデザインしたりその子の工夫が次第に生まれてきていてほっとしたのを覚えています。終わりがけに嬉しそうに絵を持ってきてくれました。僕もそこの場に立ち会えて、彼女の嬉しそうな顔を見て嬉しかったです。「表現して良かった！という感触、手応え」の積み重ねが彼女にとってはかけがえのないものになると確信しています。

結果的に、作品のようなものになる、ということは起こりますが、最初から「作品（目的を持ったもの）を作る」というスタンスで彼女と接していればきっと出来上がったものは異なったはずですし、彼女は僕に絵を持ってきたり、にんまり笑うなどというような表現を起こさなかったと思います。「出来上がったものを作品とする」という文脈で関わるのが、ありのまま表現することを保障する良い例かと思います。

小難しく書いてしまったかもしれませんが、確かに絵を描くことに興味を示さない子もいます。他の非言語活動、例えば、歌や踊り、身体を使ったものに注目して、足がずっと動いている子は、足で絵を描いてみたり、その子を観察してあげてください。反対に年齢が上がるにつれて、描画の技術的なことにこだわりや工夫がでてくれば、そういう情報提供や得意な大人が関わってあげると良いと思います。「評価」ではなく、「共感」と共に。



こどもたちとワークショップで
『なぐりがき（スクイグル）』をする様子

憧れの先生に

百花幼稚園　原田 実莉

幼稚園教諭になってあっという間に１年が経ちます。幼少期から夢だった幼稚園の先生になれることへの喜びとこんな私が先生になれるのかという不安が入り混じった４月。入園してきた子どもたちと出会い、日々の生活や活動の中で思い通りにできない自分への怒りと子どもたちへの申し訳なさが募っていきました。

私は先生に向いていないのではないかと思いながら過ごしていたある日、「せんせいあそぼ！」「せんせいだいすきー」とキラキラした眼差しで見つめながら声をかけてくれる子どもたちの姿がありました。うまくいかない日々の中でも子どもたちは私を“先生”と呼んでくれ、可愛らしい笑顔を向けてくれる。そんな姿に気が付かないほど、私は自分自身のことに精一杯で子どもたちと向き合えていなかったのです。

私の幼少期の憧れの先生はもっとニコニコと笑顔で子どもたちに寄り添い、包み込んでくれるそんな素敵な先生だったことを思い出しました。その日をきっかけに子どもたちと向き合い、じっくりと関わりながら遊んでいくと今まで気が付くことができなかった一人ひとりの思いや成長を見ることができました。そのような姿を見たり振り返ったりする時間はとても愛しく楽しい時間となりました。

子どもたちの思いを大きく感じられた作品展では、粘土を用いて色々な思いをこめて作る姿が見られました。「ママと一緒に食べたホットドッグを作ったよ」「パパと僕の好きなカブトムシとクワガタだよ」と楽しかった思い出を自分なりに一生懸命に形にし、保護者に見てもらいたいという気持ちが強く伝わってきました。どう作ろう、こうしようと想像することを楽しみ、自分の思いを形にしていく姿を見ながらいつの間にか子どもたちと一緒にいる時間が楽しく自然と笑顔になっている自分がいました。

うまくいかない日もありますが、支えてくれる方々への感謝の気持ちを忘れず子どもたちの思いに寄り添える先生でありたいです。

保育者としての鏡

さくら台幼稚園　鈴木 紗那

「大好きな子どもと関わることを仕事にすることができたらいいな」と感じ保育者になることを幼い頃から夢見てきた。

「ご入園おめでとうございます」この時から、早いことに１年が経とうとしている。入園式の日、ワクワクした様子をみせる子どももいたが、保護者の方に手をひかれながら不安そうな顔を浮かべる子どもたちが多くいた。その姿をみて、私と同じなんだと、なんだか安心した気持ちになったことを今でも覚えている。私が補助教諭として携わっている年少さんにとって、幼稚園生活１年目は私にとって保育者１年目であり、子どもと一緒に様々な経験をし、共に成長したいと考える特別な１年が始まった。

「どのような言葉がけ・関わりをすれば良いのかな」と、常に考え先輩保育者の関わり方を観察し、自分のものにしていく試行錯誤の日々を今でも送っている。初めは、保育者としての１日を終えることに精一杯だったが、今では子どもと楽しみながら学び、次の日の保育に生かすことが少しずつできているのではないかと感じている。

このように、私を「保育者」にさせてくれたのは子どもである。活動を行うにあたって、様々な子どもの姿を思い浮かべ想定してから実践する。しかし、いくら想定しても子どもは想定外の行動をする。その姿がとても面白く私を成長させるきっかけになっている。私にとって子どもとは、保育者としての自分の鏡だ。私は、子どもと関わる上で「子どもの素直さ」に救われ、時に悩まされる。私の関わりが子どもにとって良いものになる時、子どもは真っ直ぐに「大好き。楽しかった」と伝えてくれる。その言葉が、原動力になる。

入園当初は不安な気持ちでいっぱいだった私たちも、次の１年に向けて準備している。保育者としての仕事は、多くの責任を伴い日々の努力が必要不可欠だ。そんな仕事に私は誇りを持っている。これからも真っ直ぐな気持ちで子どもと関わっていきたい。

第一子出産を経験して…

幼保連携型認定こども園常葉大学附属とこは幼稚園　村本 靜香

大学卒業後、とこは幼稚園に勤務し14年。幼児期の子ども達の成長に携われる仕事に魅力を感じて就職してから、私自身保育をする中で子ども達から学んだり気付かされたりすることも多く、一緒に成長してきたと感じています。クラスの子が頑張っていることができるようになった瞬間や、友達と楽しさや喜びを分かち合う瞬間、困っている子に優しくできた瞬間、給食で食わず嫌いな子が一口食べたらおいしかった瞬間などなど、たくさんの素敵な瞬間を子ども達と一緒に過ごしてきました。子ども達の興味や好きな遊びなどを見取りながら次にどんな風になったらもっと盛り上がるかな？子ども達が自分達で考えたり工夫したりして参加しながら楽しめるかな？と日々計画を立て振り返り、職場の先生方にも相談しながら保育する毎日でした。

そんな中、令和3年12月に第一子を出産しました。1年間は初めての子育てに奮闘しながらも我が子の愛しさや尊さを実感する日々を送り、1年後の令和4年の12月に産休が明け職場復帰をし、子育てと仕事を両立する日々を送っています。妊娠中には悪阻もあり、段々と大きくなるお腹を抱えながらの保育は体力的にも精神的にもしんどさはありましたが、出産・子育てを経験して働いている先輩方が多くいるため、体調や仕事内容を気遣ってくださり、無事に産休へ入ることができました。

これまでも自園の子どもが主体的な保育を一人ひとりの気持ちに寄り添いながら保育をすることを意識し、様々な遊びや活動を子どもと一緒に楽しんでいましたが、産後復帰してからは保護者の悩みや気持ちに共感できるようになり、親目線の気持ちが強くなりました。今まで以上に保護者の思いや子どもの気持ちに寄り添うことを意識するようになり、今年度は年少児の担任として初めての経験や不安感も強い子ども達と信頼関係を築くことを大切にしています。生活習慣から色々な人との関わり、様々な遊びの経験値までも大きく成長する年少児の1年を、残り数カ月ですが保護者の皆様と情報共有しながら、幼稚園や友達を大好きになり、心も身体も豊かに成長していくよう見守っていきたいと思います。

男性保育教諭として

五和幼稚園　横田川 智寛

現在、年中組担任と発達支援コーディネーターを兼任し、子どもたちの適正就学にかかわることの難しさを感じています。担任をしていると他のクラスの子どもについて十分な話し合いの時間を取ることができず、自分のクラス以外の子どもの実態把握もままならない状態です。情報交換、話し合いの時間の確保も今後の課題だと考えています。また、保護者の思いとこちらの思いを伝えあうことでみんなが納得できる就学支援をしていきたいと思っています。この仕事は子どもたちの様々な多様性を理解するうえで勉強になっています。

私は親戚の子どもたちと遊ぶのが楽しくて、幼稚園の先生になりたいと思っていました。高校2年生の時に幼稚園の先生を目指す進路に決め、担任の先生も応援してくれました。

大学を卒業し学校法人島田学園付属幼稚園に採用していただき初任者としての研修が始まりました。世間的にも男性保育者の数が少ない中、気をつけなければならないことをまず先輩に教えていただきました。保護者の理解が得られるかという心配もありました。しかし、心配は杞憂でした。理解のある保護者の皆様に温かく迎えていただき今に至っています。

付属幼稚園で8年経験した後、法人内の人事異動で五和幼稚園に転勤しましたが、やはり保護者の皆様には温かく迎えられています。ジェンダーフリーの時代、男性の保育の仲間が増えてくれることを願っています。男性も女性もなく、みんなでなんでも言い合える職場環境をつくっていきましょう。

よき出逢いに感謝！

御殿場聖マリア幼稚園 父母の会
塔本 奈津子

「その時の出逢いが　その人の人生を　根底から変えることがある　よき出逢いを」

この言葉は相田みつをさんの「出逢い」の詩の一節です。

私自身、いつも笑顔で私を認めてくれていた先生に憧れて幼稚園教諭を目指し、夢を叶えました。そして、母となり我が子にも良き人や物や事との「出逢い」を大切に成長してほしいと願っています。

我が家には、小学校１年生の息子と、年中・年少・１歳の娘の４人の子どもがいます。息子が年中の８月に、転勤で大阪から御殿場市に引っ越しすることとなりました。全く知らない土地での幼稚園探しはとても不安でしたが、御殿場聖マリア幼稚園の教育方針に惹かれました。「命を大切にする心を育てる」「知性を育てる」「他と関われる強い心と身体を育てる」長い人生を生きていく上で何よりも大切なことですが、家庭だけでは育てることができない、集団（幼稚園）だからこそ育つものだと思います。また、縦割りクラスやモンテッソーリ教育にも魅力を感じ入園を決めました。

我が子を見ていて、自主性、探究心、集中力、挑戦する意欲、思いやりの心が育ってきていると日常生活の中で実感しています。

娘たちは事あるごとに「先生に報告しなくっちゃ！」と言います。歯が抜けた時も、髪の毛を切った時も、サンタさんにプレゼントをもらったことも、すべて話がしたいようで、「先生はなんて言ってくれるかなぁ～」とワクワクしながら幼稚園に登園します。娘たちの目線に立ち話に耳を傾けて、寄り添った声かけをしてくれる先生方が娘も私も大好きです。また、卒園した息子のことも気にかけ、遊びに行くと声をかけてくださいます。本人は少し照れが出てきているようですが、学校の様子を話しています。

このように、たくさんの愛情をいただき、多くのことを学び、心も身体も成長する姿を見ることができて嬉しく思っております。よき出逢いに感謝し、これからも就学まで親子一緒に幼稚園生活を楽しみたいと思っています。

幼稚園に「親子２代」で育てていただく

上野幼稚園 PTA 会長
髙木 法勤

我が家には、上野幼稚園年少の三男のほか、小学６年生の長女、小学３年生の長男、小学１年生の次男がおり、全員、上野幼稚園の卒園生です。

現在の上野幼稚園の吉野園長は、長女が入園する年に園長に就任されました。先生は以前、私が上野中学校に通っている時に、同校の英語の教師をされており、私も教えていただいたことがあります。まさか、「親子２代」で吉野園長にお世話になるとは思ってもいませんでした。

私は令和３年度に PTA 会長になりましたが、最初に会長のお話をいただいた時は、「自分にはとても務まらない」と思い一旦はお断りをしました。その後、再び会長の打診があり引き受けましたが、引き受けることを決めたことの中に、吉野先生が園長であるということが大きかったように思います。

実際、吉野園長であったからこそ、コロナ禍や園児数減少という状況の中での PTA の運営について気兼ねなく相談することができました。また、PTA 以外のことでも、幼稚園のことや小学校・中学校との関係性、子育てや教育、地域の話など様々なことを教えていただき、この歳になって先生と生徒のような関係性で色々と成長させてもらえたと感じています。また、吉野園長手書きの「園長だより」でも、子育てや教育について、気付かされることや改めて認識を強くすることが多く、大変にありがたく思っています。と同時に、中学時代に学校で配布されていた吉野先生手書きの「お板さまのひとりごと」（B4 用紙１枚・標記不正確）というおたよりを懐かしく思うとともに、「あの時、しっかり読んでおけばよかった。」と内容を全く覚えていないことへの後悔を募らせてもいます。

上野幼稚園での子供４人の成長とともに、PTA の活動を通して私自身も成長させていただけたことに、深く感謝しております。ありがとうございました。

最後に、県内の私立幼稚園の地域分けが改定されることを受け、「静私幼だより」が今回の発行を最後に廃刊になるとのこと。これまでに同誌の編集・発行に携わってこられたすべての方々に深く感謝申し上げます。大変ご苦労さまでございました。

歴代広報委員長一覧・現広報委員の一言感想

この「静私幼だより（協会広報誌）」も 50 年を超える長きにわたり、多くの方々に執筆・寄稿いただき 200 号を迎えることができました。編集等、静私幼だよりの発行に携わっていただきました多くの方々に心より感謝申し上げます。また、この 200 号をもちまして、静私幼だよりは最終号となります。長年ご愛読いただいた皆様にも心より感謝申し上げます。この先は、冊子という形を変化させ、また時代に合わせ進化させたモノで、引き続き皆様に情報提供できればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

また、最終号ということで、感謝の気持ちを込め、今まで静私幼だよりを編集してきた広報委員長を紹介させていただきます。そして、この最終号の編集を担っていただいた現広報委員の皆様からそれぞれ一言ずつ感想等もいただきました。

改めて、200 号という号数、そして 50 数年という長い歴史の一部ではありますが、この静私幼だよりの編集に携わらせていただけたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

広報委員長　足立 武裕（リーチェル）

広報委員として合計で 10 年と長く携わらせていただき、いろいろなことを学ぶことができました。また、委員長という大役も経験させていただき、委員会運営などについても多くを学ばせていただきました。

事務局をはじめ、印刷会社の三創様、また記事執筆をいただいた多くの皆様、すべての皆様のご協力に、心より感謝申し上げます。

副委員長　男城 茂（五和）

幼稚園協会の仕事をさせていただくことで県内幼稚園の全体像をある程度俯瞰できるようになったことがありがたいことでした。顔見知りの園長さんたちとも情報交換できるようになりました。

広報委員を２年、経営委員を２年務めさせていただきました。２時間に１本しか通らない大井川鉄道で会議に出るのは困難だったので自家用車を使用したのですが、車好きの私にはそれも楽しい時間でした。どうもありがとうございました。

鈴木 則子（沼津聖マリア）

園長になって１年目。広報委員として最初に担当したのは「編集後記」でした。「まだ編集も何も携わってないのに何を書けばいいのだろう。」と困惑したのを覚えています。

毎回の委員会での作業は私自身とても勉強になり良い経験になりました。また他の地区の園長先生方とお話ができる貴重な時間でもありました。２年間とても楽しかったです。ありがとうございました。

大嶽 素宏（さくら台）

静岡県私立幼稚園振興協会の研修などの活動や先生たちの想い、保護者の方の想いなどを広報誌としてお届けしたり、教員養成校の意見交換会などをしてきました。今後は静私幼便りという紙ベースではなく、協会ホームページなどで色々なお知らせをする予定です。

思い返せば、熱海や日本平にて県内の公園や名所を取材し掲載したり、静私幼便りの校正では、委員会の先生方とこの言葉の方が、ニュアンスが伝わるかもと検討してきました。

今後、制度面だけを考えても、こども家庭庁など幼稚園・こども園を取り巻く状況は、大きく変化しています。子どもたちの一番の笑顔はもちろんですが、園に関わる多くの人々にとっても、多くの笑顔が花咲くよう、これからも幼児教育の歩みを進めていきたいと思います。ありがとうございました。

若林 啓介（静岡若葉）

静私幼だよりの校正に携わるようになってからは保育関係だけでなく他分野における記事にもいままで以上にじっくりと目を通す機会になりました。

乳幼児の発達、発育に関する情報、マネジメント、経営に関する分野などそれぞれ著名な先生方から寄せられた原稿を拝読してヒントをいただき、考えるきっかけにもなりました。また、原稿と共に掲載する写真の選定から園での活動状況をうかがい知ることにより委員の先生方とも話し合い、交流を持てたことが良かったです。

浅沼 成之（小川）

振り返ってみれば、あっという間の２年間でした。静岡と神奈川の法人を往来する新幹線では、静私幼だよりの原稿を添削し県内各施設の教員や保護者の様子を知る貴重な時間となりました。また、毎回ナイスショットの候補に挙がる写真には、無邪気で純粋な子どもたちの一瞬を捉えた傑作も多く、私の疲れた身体と心を癒してくれました。

４月から静私幼は心機一転次の世代に向けてスタートします。加盟園すべての子どもと保護者、そして教職員のために力強く歩むことを期待すると共に、私も微力ながらサポートしていければと思います。

委員会の皆様２年間ありがとうございました。

前沢 美香（掛川こども園）

あっという間の２年間の任期でしたが、編集の校正などに関わりながら委員の皆さんの多様な意見や見識に「なるほど」と、心動かされ学ばせていただきました。この機会を頂けたことに本当に感謝しております。

広い視野を持ちながら、今後もいろいろなことに向き合っていきたいと思います。有難うございました。

副委員長　武藤 啓央（高洲・高洲南）

私が生まれて僅か２年後の昭和 45 年に協会が創立されました。これまで様々な情報を発信し続け、その歩みを記してきた当広報誌も、記念すべき 200 号という区切りを迎えましたが、長年多くの諸先輩方により受け継がれてきたその歩みの最終地点に、奇しくも今、私自身が関われていることをとても感慨深く思います。冊子「静私幼だより」とはお別れになりますが、親子の日々の暮らしや成長の姿を、そしてそこに関わる私達教育・保育関係者の思いや生の声を、これからも広く社会に伝えていくために、私たちは知恵を絞りより良い方法を見出していきます。これまで関わってこられた多くの先人達の努力に敬意を表します。ありがとうございました。

池島 真季（御殿場聖マリア）

広報委員として、多くの記事・原稿に触れる機会をいただき、貴重な経験でした。昨今の社会情勢や家庭状況の変化は、私立幼稚園にとって決して追い風とは言えませんが、幼稚園の存在意義と幼児教育の価値を今なお強く感じ、静私幼だよりに後押しされたように思います。

静岡県私立幼稚園振興協会と加盟園の皆さまの益々のご発展を祈念し、お礼の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

河原﨑 靖子（静岡サレジオ）

私が広報委員を務められ貴重な経験をさせていただいたことは、委員の方々に助けていただいたおかげであり、今思うと感謝の思いでいっぱいです。静私幼だよりが発行されるとこんな自分でも携わらせていただいたおかげで、何かとてもうれしく気持ちにもなっていました。

しかしその発行だけに留まらず、広報委員会の中で、少しの隙間時間に各幼稚園の出来事や、現在起きている子育て事情や社会問題などについて話をする機会がありました。それぞれの園や地区によって違いはありますが、子どもを思う気持ちには変わりないため、段々と意見も活発になってくる日もあったように思います。自然とわいてくるこの話し合いこそが実はとても大切なことだと感じました。

皆さま、本当にありがとうございました。

新図 一之（あけぼの）

静私幼だよりの発行は今号が最後となりますが、静私幼振興協会の数十年にわたる歩みの積み重ねが、200 号に至るまでの静私幼だよりの一つひとつに記載されているわけですから、それらを順番に並べて読み返すと協会の軌跡をよく理解することができるでしょうし、今後進むべき次の道筋も見えて来るのではないかと思います。

歴代広報委員長と理事長一覧

期　間	広報委員長	理　事　長
S45.11 ～ S53.11	北條　愛子	林　輝彦
S53.11 ～ S54. 5	後籐　鈴枝	松永　雄道
S54. 5 ～ S57. 5	小沢はなよ	
S57. 5 ～ S59. 5	浅場　慶夫	
S59. 5 ～ S63. 5	天野　正彦	
S63. 5 ～ H 2. 5	加藤　鉞夫	
H 2. 5 ～ H 6. 5	山村ちゑ子	大貫　英一
H 6. 5 ～ H10. 5	今村　淳	
H10. 5 ～ H12. 5	服部　義昭	
H12. 5 ～ H16. 5	相田　芳久	宮下ちづ子
H16. 5 ～ H20. 5	足立　一教	
H20. 5 ～ H22. 5	田中　邦昌	相田　芳久
H22. 5 ～ H28. 5	座光寺　明	
H28. 5 ～ H30. 5	後藤　正章	千葉　一道
H30. 5 ～ R 2. 5	杉山　京子	
R 2. 5 ～ 現 在	足立　武裕	

静私幼だより
NO.200
2024.03.15

ナイスショット

森には自然のおもちゃがいっぱいです！

やっつけたぞーッ！

ヨイショッ！

トトロの木　大きいね

雪合戦

3・2・1スタート!!

なわとび大好き　記録更新中！

くっつき虫が・・・・

はっけよい～～～～

みかん取ったぞ～～

編集後記

新年早々能登半島を襲った大地震により、亡くなられた方のご冥福を祈ると共に、被災された方々へお見舞い申し上げます。一日も早い復興を願うばかりです。

さて、静私幼だよりもこの 200 号をもって終了となります。創刊号より様々な内容の特集が組まれ、どの記事も保育者の資質向上や県内の子育て事情を知る上で大いに参考になり、自身の保育の糧となったことと思います。県私幼協会は新年度より組織の改編を行い新たな一歩を踏み出します。加盟園全教職員が一歩一歩確実にそして未来に向けて歩んでほしいと願います。

頑張れ 静私幼！

焼津小川幼稚園　浅沼 成之

発行人／千葉　一道
編集人／足立　武裕
広報委員会

発行所／(一社) 静岡県私立幼稚園振興協会
〒420-0853
静岡市葵区追手町9番26号
静岡県私学会館内
TEL.054(254)6820・FAX.(255)3694

印刷・レイアウト／(株)三創

http://www.shizushiyou.or.jp/
E mail: office@shizushiyou.or.jp

このQRコードを携帯電話の「QRコードリーダー」で読み込めば、協会HPの携帯サイトにそのままアクセスできます。